

バジョット『ロンバード街』における信用

——『自然学と政治学』との関連から——

山 根 聡 之

はじめに

ウォルター・バジョット (Walter Bagehot, 1826-1877) は19世紀ヴィクトリア朝中期のイギリスの政治経済評論家であり、またロンドン・エコノミストの経営者兼編集者として知られている¹⁾。とりわけ政治上の古典『イギリス国制論』と金融制度上の古典『ロンバード街』の著者として名高い²⁾。『イギリス国制論』は、当時のイギリスの法律と政治に関する様々な事実を取り扱っているが、バジョットは常に政治社会を心理的観点から位置づけている³⁾。同様のスタイルは『ロンバード街』においても貫かれており、そこでは当時のイギリス金融市場の構造が具体的に叙述されている⁴⁾。

一方、本稿で取り上げる『自然学と政治学』は、『ロンバード街』のように具体的に制度の構造を分析したものではない。『自然学と政治学』はイギリス国民の生成と展開という観点から筆が執られており、政治社会の生成と展開について『イギリス国制論』よりもさらに野心的な分析が試みられている⁵⁾。というのは本書執筆の目的が、人間社会の繁栄と衰退を支配している諸法則の原因の探求にあるからである。バジョットはこの企てのために当時の最新の自然科学の知識、たとえば生理学や病理学、地質学等の知識を動員しながらイギリスの政治社会の歴史的分析を行なっている。

社会分析のために自然科学的方法を当時いち早く採ったバジョットの姿勢については、彼の学問的背景が関係していると思われる。彼は1842年にロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに入学した⁶⁾。ロンドン大学は1828年に創設されたば

かりの新しい大学であり、ディセンター（Dissenter）に開かれた、すなわち信仰の自由が確立されたイングランド唯一の高等教育機関という特色をもっていた。そこでは古典・宗教教育よりも中産階級の価値観を反映した科学・数学・経済学といった教育が重視されていた。この新しい知的雰囲気にあふれた環境で学生生活を送ったことが、後の評論活動に大きく影響を与えたことは想像に難くない。

本稿の目的は次の通りである。本稿では、ほぼ同時期に書かれた『ロンバード街』⁷⁾と『自然学と政治学』とを関係づけ、『ロンバード街』における「信用」(credit) 概念が『自然学と政治学』を土台にしていた、と考える。言い換えれば、『ロンバード街』の主題である「最後の貸し手」の提案や金融制度分析そのものではなく、「信用」を直接の分析対象とする。

バジョットは政治社会上の制度が構成されるにあたって、公衆の心理的側面を極めて重視する。そこでは彼がイギリス社会を抽象的システムではなく、具体的つまり歴史的な所産として理解している、と考えられる。こうした観点からバジョットの政治思想と経済思想とを統合し、広い意味で歴史派経済学的な視点でバジョット思想を検討していくこととする。なお『ロンバード街』で示されたバジョットの「信用」観が、『自然学と政治学』の「模倣」理論を基盤にしている、というのが本稿の結論である。

構成は以下の通りである。第1節では、執筆時期から両書の相関関係を考察し、『自然学と政治学』に見られるバジョットの社会論の構想について検討する。第2節では、『自然学と政治学』で展開された社会論、とりわけ「模倣」(imitation, copy) 理論に注目する。第3節では、『自然学と政治学』の「模倣」理論を基礎に、『ロンバード街』における「信用」に関する分析が行なわれたことを明らかにする。以上をふまえ最後に、『自然学と政治学』を要諦とすることで、『ロンバード街』ならびにバジョット思想全体に新たな位置づけが見出だせることを提起したい。

1 バジョットの社会論：『自然学と政治学』

(1) 『自然学と政治学』および『ロンバード街』の執筆時期

『自然学と政治学』について考察を進める前に、まず『自然学と政治学』と『ロンバード街』の執筆時期について明らかにしておきたい。『自然学と政治学』は1867年11月1日に隔週誌『フォートナイトリー・レビュー』(*Fortnightly Review*)において第1章が掲載された。そして1872年に同誌に寄稿した6編の論文を収録したのが『自然学と政治学』である。雑誌連載から刊行までに5年も要したのは、この時期にバジョットが病に襲われたためである。以後1877年に亡くなるまで、病気は彼を苦しめることになる。一方、『ロンバード街』は1873年に書き下ろしとして発表された。執筆のきっかけは、1866年恐慌である。ただしこれも病気のため、刊行までに丸3年かかっている。

以上の事柄からバジョットが一時期、両作品を同時並行的に執筆していたことは明らかである。先に書かれた『イギリス国制論』においても、「イギリスの国制」(English Constitution)を「紙上の解説」(paper description)ではなく「生きた現実」(living reality)として具体的に叙述するという宣言がなされているが(CW5, p.203: 邦訳65頁)、この態度は後の作品でも継承されている。「生きた現実」を考察するためにバジョットが『イギリス国制論』において用いた分析手法は『ロンバード街』でも適用され、『自然学と政治学』ではイギリスの政治社会を歴史的に分析する際に応用されていると考えられる。それは社会を心理的に観察するという当時としては斬新な手法である⁸⁾。

(2) 『自然学と政治学』の背景

バジョットの伝記作家 A. バカンによれば、『自然学と政治学』が書かれるまでは、政治制度をそれらが志向する社会の結合力や成人に関する意識のレベルに言及せずに、道德の観点から考察することが多かった。しかし「慣習の堆積」(cake of custom)は社会のごく初期の段階では第一義的だが、時代を経る毎にそこから発展・解放されていくことをバジョットは強調する。この変化に対する

適応力の中に、彼は前進する社会と停滞する社会の相違を見出している。

そこでバジョットが注目するのが、当時の自然科学・技術の目覚ましい躍進である。

「この時代の一つの特質は、多くの自然科学的な知識を急激に獲得したことにある。学問や芸術の分野においては、50年前と比べて同様または全く同じと言われるものはほとんど見当たらない。たとえば鉄道、電信などという諸々の発明がもたらした新世界が我々の周囲に生じてきており、我々はこのことを認識せざるを得ない。諸々の思想の新世界が、たとえ目に見えずとも大気に広がっていて我々に影響を与えるのである」(CW7, p.17: 邦訳3頁)

1850-60年代のイギリスでは産業・技術の進展の下に、科学知識の日常への効用が深く認められるに至った。そして科学知識の成果を基礎にした諸産業や技術上の優位の認識は、文明あるいは社会の優位の認識へと転化した。そのような認識の下で当時の社会科学界では、野蛮→停滞文明→先進文明といった社会の発展段階には法則性が認められるか、という課題に関心が向けられていく⁹⁾。

歴史あるいは文明史への自然科学の適用という点で、当時非常に高く評価された作品が二つある。一つはバックル (Henry Thomas Buckle, 1821-1862) の『英国文明史』(*History of Civilization in England*, 2 vols, 1857-1861) であり、もう一つはメイン (Henry James Sumner Maine, 1822-88) の『古代法』(*Ancient Law: Its Connection with the Early History of Society and its Relation to Modern Ideas*, 1861) である。『自然学と政治学』執筆に際して、バジョットはこの二つの作品から大きな影響を受けている。

バックル『英国文明史』は、「人間の行動、それ故社会の活動は一定の法則により支配されているか、あるいはそれらのものは、偶然か何か超自然的干渉の所産なのか」と問うて、その法則指向性を示している。と同時に、この「一大疑問」に対しては、統計学の適用により、人間の行動は一定の法則により支配されていることが判明すると解答する¹⁰⁾。『英国文明史』は一般に、第一章の、歴史の物理的要因の重視という点のみが注目されることが多いようである。しかし

バックルは第三章において、「人類の進歩 (progress) を統御する法則の二種類のうちで、精神的 (mental) なものの方が物理的 (physical) なものよりも重要である」と指摘する。この精神的要因は、「道徳的法則」(moral laws)と「知的法則」(intellectual laws)とに分けられ、文明の進展と人類の幸福は前者よりも後者に大きく依存すると結論されている。道徳は時代にかかわらず半ば停滞的かつ固定的であるのに対して、知識は時代とともに変化するからである。

一方でバジョットは、メインの主張する説も自らの原始社会研究の基礎としていた。たとえばバジョットはメインの説を以下のように引用している。

「政治思想史は血縁社会が政治社会の唯一の基礎であるという思想から出発する。しかし同じ土地に居住する原理が初めて政治社会の基礎として確立された時に起こる変化ほど驚くべき変化はなかった」(CW7, p.29: 邦訳28頁)

とはいえ、バジョットはメインの説に必ずしも賛同しているわけではない¹¹⁾。バジョットが注目したのは、メインが指摘した時代よりさらに前の時代、つまりバジョットが言うところの「準備の時代」(the preliminary age)¹²⁾における「闘争」(conflict)だった。では「闘争」およびそれに付随する要素が社会を統治することで、どのような効用がもたらされるのか。バジョットは、自然科学的手法を社会分析に採用する。

「ところで、全ての学問上の重要な概念というものは、その適用範囲を拡大しようとする傾向があり、またそれが使用された当時は考慮されなかったような問題を解くために適用される傾向があるのと同じように、ここでは、単に動物の歴史に用いられたものを、形式の上ではある程度の変更改が加えられるとしても、本質的には少しも変わるところがなく、人間の歴史にも適用しようとするのである」(CW7, p.42: 邦訳54頁)

バジョットの理論の特徴は、「動物の歴史」という言葉から推測できるように、生物学の理論、たとえばダーウィン（ならびにスペンサー）の進化論の適用にあ

る¹³⁾。このことは『自然学と政治学』の副題が「政治社会への自然選択と遺伝の原理の適用に関する諸考察」であることから明らかだろう。さらに付言すれば『自然学と政治学』という表題も、政治学研究への自然科学的アプローチを表明したものと考えられよう。ただし、この表題を単に生物学的方法を政治社会分析に応用したもの、と額面通り受け入れることには注意が必要である。むしろ『自然学と政治学』においては、『ロンバード街』で採用されているいわゆる「心理的解釈」の手法を用いて社会を分析する試みがなされていると言えよう。事実、『自然学と政治学』が20世紀初頭のアメリカ社会学に影響を与えていることから、社会分析に心理的手法を適用する先駆的作品となったことは間違いない¹⁴⁾。

2 「模倣」の理論

(1) 政治社会の三段階論

バジョットは『自然学と政治学』でイギリスの政治社会を分析するに当たって、以下の三つの時代区分を設けている。

〔1〕「準備の時代」(The Preliminary Age)

〔2〕「闘争の時代」(The Age of Conflict)

〔3〕「議論の時代」(The Age of Discussion)

第一段階の「準備の時代」は政府の萌芽時代でもある。その特徴は、多くの協同的集団(部族・国民)が閉鎖経済の下で独立に生活し、1つの集団が他の集団との間に嫌悪・敵対関係があるという点である¹⁵⁾。バジョットによれば、「準備の時代」における集団とは「模倣」(imitation, copy)に基づいた類似性によってお互いに協力し、また共通の規則に従うまとまりのことである。ここで慣習が生じてくるのだが、「模倣」の指摘はきわめて重要と思われるので、後に詳述する¹⁶⁾。

次に政治社会は第二段階である「闘争の時代」、つまり「国民生成の時代」(The Nation-Making)を迎える¹⁷⁾。ここで重要となるのが「闘争」(conflict)である。バジョットは「闘争」を、ある集団が別の集団を征服する例をもとに説明しているが、その際問題になるのが武器である。初期の戦争(war)は全て総

力戦だった。一度集団間で闘争が始まると、集団の持つ知識と能力を総動員しないと、その集団は滅亡に追い込まれる。したがって集団は絶えず強い集団であろうとし、そのために集団はできるだけ良い武器を作り、またそれを「模倣」した。このようにバジョットは闘争の要因が物資の争奪に基づく生存競争にあり、それが武器の発達を促したとしているが、この場合でも重要な機能は「模倣」である。

「闘争」の勝者となるためには社会の団結が必要であり、その団結は「統治」(government)によって強化される。準備の時代においては統治は厳格かつ簡潔な法律によって裏打ちされる。ただしこの場合、バジョットは統治の「質」(data)よりも統治の「量」(quæsitum)が要求される点に注意する(CW7, p. 31: 邦訳31頁)。

「ここで問題となるのは、人々を団結させ、同じ事柄を多く行わせることであり、相互に何を期待しているかを告げるような一種の包括的な規律(rule)である。いいかえれば人々を似通わせ、そうした類似の状態を継続させるような一つの包括的な規律が何か、ということである。この規律が実際に何であろうとそう大した問題ではない。立派な規律は悪い規律よりももちろん優れているが、どんな規律でも全くないよりはましである。……こうした規律を確立するためには政治社会の印象的要素(the impressive elements)とでもいうべきものの方が、単なる有用的要素(the useful elements)よりも比較にならないほど重要である。人々をいかにして服従させるかという事は難しい問題だが、服従をどのように扱うかはそう重要な問題ではない」(CW7, p.31: 邦訳31-32頁)¹⁸⁾

ここで挙げられている政治社会の「印象的要素」と「有用的要素」は、『イギリス国制論』における「権威的部分」(the dignified parts)と「実践的部分」(the efficient parts)に照応する。それと同時に、公衆の信従を広く得るためには尊敬の感情を刺激するような要素が必要である、というバジョットの社会理論の基礎概念が強く表れている。

(2) 国民形成における「模倣」作用

バジョットが『自然学と政治学』において展開する基礎理論というべきものが「模倣」の概念である。バジョットによれば、「国民性」(national character)を作り上げる主要な原動力は「模倣」作用である。

歴史的・社会的条件にしたがって「国民性」の本質を正確かつ具体的に把握することは難しい。この点はバジョットも留意しており、あくまでも蓋然性の高い抽象的な定義と論考にとどめる、と宣言している。バジョットによれば、国民とは精神的思考の類似を感じることができ、そのような統一感に基づいて結合する共同的集団の一典型である。そして「国民形成」の統一感をもたらすものこそ「模倣」の機能である。「模倣」は、社会的な暗示作用とも言い換えられるだろう。ここで重要なのは「模倣」される原因は何でも良い、という点である。バジョットは原因よりもむしろ、「偶然」(chance)によって「模倣」が社会に作用することを重視した。すなわち、「偶然の優位」(chance predominance)によってモデルが作られ、人々が(無意識的に)「模倣」していくことで、「慣習の固着」(cake of custom)が起こる。生物学における「自然選択」(natural selection)の原則が働く(個体の獲得形質が集団へと拡張していく¹⁹⁾)ことで、「模倣」された言葉や思想が「文明の鋳型」(the mould of civilisation)を作り、一種の国民性として定着したというのである。国民を形成する元となる時代の精神を作るものは「形式」(form)²⁰⁾であり、「偶然」により、人々は形式のまとまりである「型」(type)によって導かれる²¹⁾。このようにバジョットは「模倣」を人間性の最も根強い機能と考えていた。

「尊重される性格の無意識的な模倣および衝動、同じく嫌悪される性格を無意識的に忌避することが、我々が今日見るような社会において、人々を形成し創造する主要な力である。気候の変化、政治制度の変革、科学の進歩(progress)と一般に承認されている原因も、根本的にはこの原因を通じて働き、模倣および排除の対象を変更することで、それぞれの社会的効果を及ぼす」(CW7, pp.37-38: 邦訳41頁)

しかしバジヨットは「模倣」を国民形成の唯一の指導原理であるとは考えない。「模倣」がその勢力を有効に発揮するには、一定の歴史的社会的条件を前提とするからである。そこでバジヨットは自然選択の原則に基づいた三つの法則を提示する。

「第一に、世界のあらゆるそれぞれの国 (every particular state) で、最も強い国民 (nations) が他の国民を支配しようとする傾向がある。そしてある重要な諸特性 (peculiarities) において最も強いものが最良となり得る傾向がある。

第二に、いかなるそれぞれの特定の国の国民においても、当時そこで最も魅力のある (attractive) 性格の型ならびに諸型が支配的となる傾向がある。そして最も魅力のあるものが、例外はあるにせよ、我々が最良の特徴と呼ぶものである。

第三に、このような強者と弱者との間の闘争というものは、大抵の歴史的な状態においては、外部的勢力によって強められるのではない。ただある歴史的状態、たとえば現在世界で最も有力な国で行われているような場合においてのみ、このような諸勢力によって強化される」(CW7, p.42: 邦訳54頁)

この三つの法則をバジヨットは「自然科学における『自然選択』(natural selection) の名の下に一般に知られている学説 (doctrine) なのである」(CW7, p. 42: 邦訳54頁) という。ただし彼は以下のように付言している。

「これら三つの法則を論じる場合……これらを完全に分離して論じることはできない。しかし私がここで取り扱えるのは、ほとんど第一の法則だけに限られている。つまり国民 (nation) と国民、種族 (tribe) と種族 (私はこれらの言葉を最も広い意味で用いており、ここでは人間のあらゆる緊密な集合 (cohering aggregate) を含めている) との間における競争についての法則である」(CW7, p.43: 邦訳55頁)

さて「準備の時代」を経て第二段階の社会の「闘争の時代」に至ると、社会組織の目的は慣習法の創造に向かう。バジヨットによれば、慣習は一個人や特定の小集団によって考え出されるものではなく、世代を重ねながら「模倣」と排除の両方の力が作用して形成される歴史的・社会的産物である。慣習を守る者は受容

されるが、拒否する者は排除される。

このような国民形成の説明に見られるように、バジョットは社会生活における「模倣」の要素を極めて重視している。とはいえ、バジョットが「模倣」と表現する意味内容はむしろ暗示に近い。また彼の言う「模倣」とは言わば社会の保守的勢力を指しており、そのために慣習が社会に固定し保持されていくと解釈できる。

(3) 「議論の時代」

先に述べた時代区分によれば、未開社会から文明社会に至るには、バジョットのいう「準備の時代」(The Preliminary Age)から「闘争の時代」(The Age of Conflict)を経て、「議論の時代」(The Age of Discussion)へと進む。この「議論の時代」こそ、バジョットが考える近代社会像であり、また当時のイギリス社会が到達した(とバジョットがみなした)段階である。

「この答えというのは、身分の時代から選択の時代への移行(the change from the age of status to the age of choice)であり、政府が著しい程度にまで議論の行なわれるものとなっている国家において、そしてその議論の対象となるものがある程度抽象的なもの、言い換えれば原理(principle)の問題であるような国家において、初めて行なわれた……」(CW7, p.107: 邦訳193頁)

「議論の時代」、言い換えれば「身分の時代から選択の時代への移行」時代の特徴は、バジョットによれば「活力を持った中庸」(animated moderation)という性質である。すなわち、議論による行動と思想の行き過ぎを抑制し、精神の行動力と均衡を兼ね備える、というわけである²²⁾。その結果「議論による統治」(government by discussion)の時代へと至る²³⁾。

「議論の時代」では従来の固定的慣習が打破されることになる²⁴⁾。国民が形成されつつあった時代では神聖化された厳格な慣習が重要な役割を果たしたが、慣習はやがて人間社会の進歩と創造性を阻害するようになる。したがってある国民

が秩序と自由意思 (free will) の観念とを併せ持つことができたならば、固定的な慣習の絆は打破され、社会は弾力的な活動を始める契機を獲得するようになる。このように『自然学と政治学』において、バジョットは社会の成立と進展を心理的に動機づけられたものと把握した。『自然学と政治学』で重要な示唆は、何らかの要素が偶然によって集団に承認され、「模倣」されることで社会全体に拡張されると捉えられている点である。『イギリス国制論』では君主に対する「忠誠」が、『ロンバード街』では中央銀行に対する「信用」が、政治社会で「模倣」される印象的要素として重視されている²⁵⁾。とりわけ『自然学と政治学』と同時並行的に書かれていた『ロンバード街』は、『自然学と政治学』で理論化された社会の心理分析の事例研究と位置づけることができる。

3 『ロンバード街』における「信用」

(1) 景気循環の指摘

バジョットによれば、経済学は「実業 business の科学」であり、その分析対象は主としてイギリスにおける巨大な生産的・巨大な商業的社会における事業である。巨大な商業社会において不可欠なのが『ロンバード街』で分析対象とされた金融市場である。

ところで、バジョットは学究の徒であると同時に銀行家業を継いだ実務家だった²⁶⁾。1858年に雑誌『エコノミスト』の創立者ジェームズ・ウィルソン²⁷⁾の長女と結婚し、それによって義父の死後に『エコノミスト』の主筆兼経営者となったのである。

バジョットは実務家の観点から、ロンバード街を「世界における未曾有の経済力と経済的敏感さ (economical delicacy) との総合」(CW9, p.49: 邦訳14頁)と位置づけている。「貨幣は経済力」(CW9, p.49: 邦訳14頁)の証であり、イギリスは当時世界最大の資金国の地位にあったが、彼はその地位がイギリス銀行制度の成果によるものと考えた。ロンバード街は常に資金を得られる場所であり、ここでの取引によって資金は不利な産業から有利な産業へとイギリス国内を急速に移動していく。しかし彼によれば、イギリスの金融機構は圧倒的に強い力を

もっているのだが、同時に繊細でもある。バジョットはロンバード街が特別な利益と同時に、特別な危険をもたらすこともあると強調する。

『ロンバード街』では景気循環の存在の指摘も重要である²⁸⁾。この指摘は当時としては非常に早い。バジョットは19世紀中期の政治経済学者たちが景気循環を適切に取り扱っていないと言う。従来の政治経済学者のように、パニックの発生原因を分析・分類することにはさほどの意味がないからである。パニックの発生原因が何であれ、重要なのは必然的にパニックが起こってしまうということであるとして、彼は次のように述べる²⁹⁾。

「……ここで極めて重要なことを指摘せねばならない。すなわち我々の産業組織は不規則な外部の偶発的事件ばかりでなく、また規則的な内部の変動の影響も受けるのである。このような変動は我々の信用制度を時に普段よりもひどく過敏にし、またこの過敏な時期は周期的に循環する。そこでこの点からパニックは一定の原則に従って襲来するという考えが——十年毎あるいはそれに準ずるほどの頻度で必ずその一つに遭遇するという考えが——生まれてきたのである」(CW9, p.110: 邦訳127頁)

同時にバジョットは「当時の政治経済学が、時間 (time) を取引活動における一要素として十分に考慮していない」(CW9, p.110: 邦訳127頁) という。一度分業が確立した社会では、財の生産は近未来の消費を目的とする。このような観察結果から、彼は理論上の二つの基本要素を提示する。第一は、市場の相互依存、言い換えれば「諸産業の共同関係」(the partnership of industries) (CW9, p.111: 邦訳129頁) である。第二は、「信用」(credit) 制度を通じて働く未来への期待の役割である。

第一の要素である市場の相互依存を用いて、バジョットは景気循環の累積的な上下運動を説明する。ここで彼は不作や豊作の影響、つまり食料以外の他の財貨に支出する量に対する食料の収穫量を例にあげている。その上で、食料の収穫だけでも小さな景気循環を生む導因となることを示している。収穫量は時期や地域ごとに差があるからである。

第二の要素である「信用」については、次のように述べられている。

「信用、つまりある人が他の人を信用するという傾向は非常に変化しやすい。イギリスでもひどい災難の後には人は人を疑う。災難が忘れ去られると人は再び人を信頼する (confides)」(CW9, p.113: 邦訳132頁)

1870年代のイギリスを他の諸国と比べたときにイギリス独自の性質として、バジョットは「信用」のもつ大きな役割をあげている。未来に対する見方が概ね楽観的である場合、「信用」の状態は良好で、財貨は素早く持ち手を変え、生産量は増大する。

バジョットは良好な信用状態を「真の繁栄 (real prosperity)」の原因と考える。ところが、いつ繁栄が終わるのかを見極めることは難しい。資本が期待されるような収入を生まなくなったとき真の繁栄は終わりを迎えるが、真の繁栄の中で暮らす幸福な人々は強気であったり信じやすい状態にすることが多い。このような危機と不振の原因となる舞台装置を、彼は「熱狂の要素 (the element of mania)」と呼ぶ (CW9, p.114: 邦訳132頁)。すなわちバブルである。

「熱狂」は突然現れるのではなく、何らかの要因から自然に成長してくるものである。たとえば食料の豊作によって繁栄がもたらされると、食料以外のものに支出を振り向ける消費者が増し、「信用」の改善によって収益増を目的とした有給貯蓄の持ち出しが行なわれる。短期の場合、投資の奨励は貨幣市場や各種産業に需要を作り出す。その結果、中・長期の場合とは違って、好ましくない状況が生まれる。すなわち「自信にあふれ熱烈な (the sanguine and ardent) 人々」の圧力が財政的・自然的資源に逆らって発揮され、「それが現実的である限り不安定で、それが仮想的である限り一時的」な繁栄が作り出される。こうして危機が準備され、債務縮小の願望が生まれ、ひいては「信用」喪失に向かっていく (CW9, p.127: 邦訳154頁)。このようなバジョットは景気循環を、経済的営みに根ざした不幸かつ不可避な過程である、とみなした。

以上、バジョットの景気循環に対する見解は、『自然学と政治学』の「模倣」理論に符合すると思われる。つまり「信用」にせよ「熱狂」にせよ、あるいは「熱狂」状態から冷めて「信用」が喪失する場合にせよ、ある要素が偶然に人々

の印象的要素となり、それが「模倣」の形で伝染していく。その意味において『ロンバード街』の景気循環の分析は、まさに『自然学と政治学』における「模倣」理論が、彼の金融市場の「信用」制度認識に基づいて展開されているとは考えられないだろうか。あるいは「信用」を軸に景気循環を心理的に分析したという点で、『ロンバード街』で提示されたパニック対策（金融不安解消のための政策的努力）は、『自然学と政治学』で問題とされた「模倣」理論に根ざしていると論じることには、幾分の妥当性が見出されるのではないだろうか。たとえば、それは以下の引用からも見て取れる。

「我々がロンバード街の不可避な栄枯盛衰をも理解したからには、我々はまた、多額の銀行準備金を常に保有することの基本的な重要性を徹底的に理解できるようになる。逆境がうまく切り抜けられるか否かは、他のいかなる単一の事情よりもはるかにこのことに大きく依存している。もし準備金が大きくなれば、その膨大な額が信用を支えるのであり、もしその額が小さくなれば、その減少分が最も重大な不安を刺激するのである。我々が銀行準備金の重要性をよりよく理解すればするほど、我々はそれを保有する人々の責任を高く評価するのである」(CW9, p.128: 邦訳156頁)

ただし『ロンバード街』はイギリス金融市場の分析を試みながら、同時に1866年恐慌をきっかけに書かれた具体的な政策提言書であり、その意味で時論的性格の強い作品である。『ロンバード街』が導き出した結論は、金融市場が景気循環から免れ得ないという事実だった。しかし恐慌が不可避であると理解できれば、公衆は突如襲来するパニックに慌てふためくこともなくなる。何よりも、ロンバード街にはかつてないほどの「信用」がある。ただしこの「信用」はひどく敏感なので、何らかの理由で弱められると些細な出来事からも損害を被り、崩壊する恐れがある。したがってバジョットは、繁栄の時期にイングランド銀行が多額の準備金を維持し、利子率政策において金の流出（とりわけ国外への金の流出）に敏感に反応すべきである、と主張した。このような背景から、バジョットはイングランド銀行の多額の準備金を「信用」保持のための最後の拠り所と考えたのである。

(2) イングランド銀行の獲得形質としての「最後の貸し手」機能

先述したように、『自然学と政治学』における重要な原理は、自然選択による獲得形質が「模倣」によって集団・社会に拡張していくことである³⁰⁾。さらに付言すれば、『自然学と政治学』では「金融市場の信念も、他の社会と同じように模倣的である」(CW7, p.71:邦訳118頁)と述べられている³¹⁾。『自然学と政治学』では、魅力のある型が「模倣」によって支配的になり、それが次第にその時代最良の要素へと転化していくとみなされている。この認識は、『ロンバード街』の銀行業務の把握にも反映されていると考えられる。

「(銀行業の開設の——引用者註) 実際の歴史は非常に異なっている。新たな欲求は適用(adaptation)によって満たされるものであって、創作や創設によってではない。ひどく緊急の欲求を満たすものが何か作り出されると、それは比較的緊急でない欲求を満たすことにも、あるいはまた付随的便宜を与えるためにも利用される」(CW9, p.86:邦訳86頁)

イングランド銀行は1694年に、戦費調達のために預金銀行として誕生した。その意味では、規模はともかくとして、他の銀行と変わりなかった。しかし時を経るにつれて、新しい役割が求められるようになった。

「最初の銀行は我が国の預金銀行業の如き制度を目的として、あるいはそれに類する何らかのものを目的として創設されたのではなかった。それは緊急の理由によって創設されたのであって、創設後にそれが、あるいはそれに倣うものが我々の近代的用途に適用(adaptation)されたのであった」(CW9, p.86:邦訳87頁)

バジョットによれば、イングランド銀行の機能と役割は時代の要請に「適応」(adaptation)しながら成長してきたのである。

「我が銀行業の単一準備制度(one reserve system)は、一定の論拠に立って熟慮して樹立せられたものではなく、多数の特殊な事情によって、また単一の銀行に対して

与えられた、今日では既に改められ、何人も擁護する者のないような、法律上の特権の累積によって徐々に生じてきた結果だったのである」(CW9, pp.97-98: 邦訳106頁)

多数準備制度下の一民間銀行として出発したイングランド銀行は、イギリス政府の支援を受けながら成長を遂げ、1844年のピール条例を経てイギリス唯一の巨大銀行と化した。これが、バジョットがイギリス金融市場を、イングランド銀行を頂点とする単一準備制度と観た根拠である。彼は、もはやイングランド銀行はイギリス金融市場における中央銀行である、という認識を持っていた³²⁾。ところがイングランド銀行自体は、自らの立場の変質を理解しておらず、未だに自らをイギリス最大の一民間銀行としか把握していなかった。1866年恐慌で企業の連鎖倒産が相次いだ時、イングランド銀行はマクロ経済的な視点から「最後の貸し手」機能を発動すべきだった、とバジョットは考えた。そこで『エコノミスト』誌上におけるイングランド銀行理事 T. ハンキーとの論争を経て発表されたのが『ロンバード街』だった。このように『ロンバード街』は、イングランド銀行に対する抜本的改革を盛り込んだ政策提言書の色合いが強いものの、それ以上にイングランド銀行が中央銀行としての自覚を持つべきである、という強い意志が込められた作品だった。

実はバジョットの指摘以前に、イングランド銀行は「最後の貸し手」機能を発動したことがあった。ただしその際のイングランド銀行の対応は場当たりの、理論的に対処してきたとは言えなかった。そこでバジョットは、自分のような金融業界の専門家とイングランド銀行との間に認識のズレがあることを指摘し、同行に対して最後の貸し手としての機能を明確にせよ、と「最後の貸し手」機能の慣行としての追認を要求したのである³³⁾。

ここで再び『自然学と政治学』の「模倣」理論を『ロンバード街』の「信用」に適用するならば、イングランド銀行は、偶然の優位によって単一準備制度の頂点に位置するようになり、後に「最後の貸し手」機能を獲得した、と考えられる。その結果イギリス金融市場において、イングランド銀行は事実上の中央銀行であ

るとみなされるに至った³⁴⁾。公衆がイングランド銀行の「最後の貸し手」としての役割を承認し、その役割の発揮を期待するようになると、同行の経済的権限を越えた経済的権威が付与されるようになる。イングランド銀行は、恐慌時において「最後の貸し手」機能を「行使」するが、まさにその機能によって、平時からイギリス金融市場における権威を「獲得」するようになる。こうして「獲得」された権威によって、イングランド銀行はもはや民間銀行としての利益追求原理に基づいて行動することが許されない存在となる。これをバジョットは「ロンバード街の君主制的形態 (The monarchical form of Lombard Street)」(CW9, p. 93: 邦訳100頁) と呼び、内外 (イングランド銀行およびイギリス金融市場) に単一準備制度の確立と承認を求めたのである。『ロンバード街』のイングランド銀行に対するこのような要請も、『自然学と政治学』の「模倣」理論を土台としてイギリス金融市場の「信用」の動向を観察した結果の所産だったのである。

おわりに

本稿では『自然学と政治学』を媒介に『ロンバード街』を捉え直す作業を試みた。そこで軸となったのは、「模倣」と「信用」の概念である。最後に『ロンバード街』における「信用」を把握するために、『自然学と政治学』の「模倣」論から派生した、権威への人々の信徒ないし服従の認識について見ておきたい。

「取引における信用は、政治における忠誠のようなものである。……全体は慣習と歲月によって作り出された本能的信頼を基礎としている」(CW9, p.81: 邦訳78頁)
「信用は成長 (grow) はするが、作り上げる (construct) ことのできない力である」(CW9, p.81: 邦訳79頁)

バジョットは、「偶然の優位」から出発したイングランド銀行が預金銀行業とは別の機能を獲得したことで、中央銀行という新しい個体へと成長したと考えた。ここで言うイギリス金融市場における「模倣」とは「信用」の拡大と縮小を意味する。言い換えれば市場の期待や不安であり、そこにはイングランド銀行に対す

る市場の期待や不安の伝染も含まれる。また長年の慣習の堆積とイングランド銀行の規模と影響力の成長、そして他の民間銀行の淘汰によりイングランド銀行が権威を獲得したという歴史的事実も、公衆の「模倣」に基づいた「信用」の集積によるものである。

以上、バジョットの心理的な社会分析の要諦として『自然学と政治学』を捉えることで、『ロンバード街』の「信用」制度認識がどのように形成されてきたかがより明らかになったと思われる。彼は、イギリスの政治社会ならびに金融市場を抽象的システムではなく、歴史的な所産として理解しようと努めた。その具体的・歴史的なケーススタディとしてイギリス金融市場を対象にしたものが『ロンバード街』だったのである。もちろん『ロンバード街』の執筆意図は、何よりもまず短期的・具体的な政策提言を目的とした作品である。だが『ロンバード街』における「信用」分析の背景には、『自然学と政治学』に表わされた「模倣」理論という歴史的な分析射程があったと考えるべきだろう。

このようにバジョット研究において、『自然学と政治学』は極めて重要な作品であり、バジョット思想の要であると言えよう。その後バジョットは『自然学と政治学』のテーマだったイギリス政治社会の歴史的発展という問題関心をふまえつつ、イギリス古典派経済学に関する研究へと移すことになる。そこで本稿との関連で、イギリス歴史派経済学とバジョットとの関係を明らかにせねばならないのだが、それについては機会を改めて考察を深めることとしたい。

〔付記〕本誌レフェリーの詳細かつ有益なコメントに感謝申し上げたい。

- 1) バジョットの引用は全て『バジョット著作集』(Bagehot, W. (1965-86) The Collected Works of Walter Bagehot 15 Vols, ed. Norman St. John-Stevan, The Economist) からである。紙幅の都合上、CWと略記し、直後に巻号ならびに頁数を示している。著作名略記、邦題、著作名、巻数、初出年は末尾の参考文献表を参照。なお引用箇所は適宜改訳している。
- 2) バジョットは政治心理学の開拓者として、あるいは当時の金融ウォッチャーとしてしばしば高い評価が与えられてきたが、彼の研究そのものの数は少ない。とりわけ『自然学と政治学』研究はバジョット研究の中でもきわめて少ない。この分野で

問題とされるのは、進化ないし社会進化論との関連であり、彼の政治社会に対する歴史的把握が問題とされる。代表的なものにバーカー『イギリス政治思想Ⅳ——H. スペンサーから1914年』(Baker, E. *Political Thought in England: Herbert Spencer to 1914*, Oxford University Press, 1946.) 第5章の記述などがある。またこの分野の流れをまとめたものとして岩重政敏「バジョット『フィジックス アンド ポリティックス』——その標題と主題」(『自由と自由主義』佐々木毅編, 東京大学出版会, 1995年) などがある。

『ロンバード街』については現代の中央銀行論、とりわけ「最後の貸し手(LLR)」議論との関連で触れられることは非常に多いものの、『ロンバード街』それ自体に関する研究は多くない。プライス『英国経済学史』(Price, L.L. *A Short History of Political Economy in England, from Adam Smith to Arnold Toynbee*, 1890.) 第6章におけるバジョットの記述, そして Fetter, F.W. *Development of British Monetary Orthodoxy, 1797-1875*, Harvard University Press, 1965. の第9章, バジョット全集公刊に際して寄せられたセイヤーズの諸論文 (Sayers, R.S. 'Bagehot as an Economist' など), 藤田幸雄『中央銀行の形成——イングランド銀行の史的展開——』多賀出版, 1987年), 金井雄一『イングランド銀行金融政策の形成』(名古屋大学出版会, 1989年) などがある。

なお『イギリス国制論』をはじめとする政治分野における先行研究の分類は、遠山(2001)を参照させていただいた。遠山(2001)による従来研究の傾向のほとんどの指摘は、バジョットの経済分野における研究史にも当てはまる。つまり『ロンバード街』研究史においても、現代の視点からの抽象理論の文脈(たとえば「最後の貸し手」についての議論)によって読み解く, という傾向が強く見受けられる。

またバジョットの先行研究における関心の対象は、概して彼の主著それぞれに単独に向けられてきたと言って良い。したがって複数の分野にまたがるバジョットの著述活動を詳細に観て、彼の思想を総合的に捉える必要がある。

- 3) ここではバジョットが(本人は自覚していないものの)社会心理学の先駆者という意味で捉えられている。つまり議論の前提には、人間の心理や情動の構造から政治社会の現象を理解する心理主義の考え方がある, という意味で把握されたい。
- 4) ケインズはバジョットが『ロンバード街』で採った分析方法から、彼を「心理学者, もしくは心理分析者」であるとしている。Keynes, J.M. (1926) p.533.
- 5) 「『種の起源』に関する論争が20年間に及ぶ知的動乱の猛威をふるっていた時期の1871年に、『人間の由来』(The Descent of Man 引用者註: ダーウィンの著作)が出版され, そこで初めて人類の進歩の教義に対する自然選択の理論の十分な重要性が科学の世界で理解された。スペンサー氏(引用者註: Herbert Spencer)は『種の起源』が世に出たときそれを悟った。ダーウィン氏自身は容赦ない生存競争

が正義という安らかな現実をもたらすという逆説を納得できるように解説せねばならないと自覚していた。しかし、そのような神秘に対する手がかりが求められるかもしれない生存競争の特殊な局面を最初に認識していたのは、スペンサー氏でもダーウィン氏でもなかった。その発見をした才能豊かな思想家は、『ロンドン・エコノミスト』誌の編集者である、ウォルター・バジョットであった。彼の著作『自然学と政治学——自然選択と遺伝の原理の政治社会学への適用』(*Physics and Politics, or Thoughts on the Application of the Principles of Natural Selection and Inheritance to Political Society*)は、『フォートナイトリー・レビュー』誌の巻頭で1867年11月から一連の論説として発表が始まった。ダーウィン氏はこの評論をまさに「注目すべき」ものとみなしている。……これほどオリジナリティと才気にあふれ……その当時から現在までのヨリ深い社会の因果関係の問題に対する十分な調査を行なっているものは他にない。この評論は後の説明において最も価値あるものと見込まれる」Giddings (1909) p.76.

- 6) バジョットがオックスフォード大学やケンブリッジ大学を受験しなかったのは、当時父親の反対する宗教教義上の試験が課されていたためである。バジョットの母親は国教徒だったが、父親は非国教徒であるユニテリアン派に属していた。
- 7) ロンバード街 (Lombard Street) とは、ロンドン・シティのイングランド銀行からグレースチャーチル街 (Gracechurch Street) に至る狭い通りの名前であり、スレッドニードル街 (Threadneedle Street) と並んでロンドン金融市場の中心地である。『ロンバード街』はこの通りの名前にちなんで名付けられた。バジョットは本の表題としてイギリス金融の中心を具体的な地名で記述することで、イギリス金融市場の内実を表わそうとしたのである。CW9, p.48: 邦訳12頁。
- 8) バジョットが自らの手法を「心理的」方法、と自覚していたとは考えられない。というのは、当時の心理学が未だ社会心理学 (social psychology) に到達しておらず、一般に連想心理学 (association psychology) の段階にあったからである。彼が用いたような手法を取り入れた社会心理学がイギリスないし米国、大陸ヨーロッパで台頭してくるのは19世紀末から20世紀初めである。なお『自然学と政治学』および『ロンバード街』において、心理学 (psychology, mental psychology) や心理的 (psychological) という言葉は一切用いられていない。したがって彼が採った手法が、後の研究者によって「心理的」方法であると整理・判断されたことには注意が必要と思われる。手法が「心理的」とであるという指摘については、Giddings (1909) や Baker (1946) 等を参照。
- 9) いわゆる社会進化論的な発想は『種の起源』(1859) 以前にも普及しており、そうした考え方は既に準備されていたと言える。
- 10) バックルと統計学的手法の関係については、イアン・ハッキング (1999) 『偶然

を飼いならす」石原英樹・重田園江訳、木鐸社が詳しい。

- 11) 「私はサー・ヘンリー・メインの提言は——彼はそれを自信をもって提唱してはいるようにだが——政治の真の起源としては適当な説とは思えない」CW7, p.30: 邦訳30頁。
- 12) 「準備の時代」とは、いわゆる石器時代ではなく、「前経済時代」(The Pre-Economic Age)を意味する。雑誌連載時は、第一章の表題がそのまま「前経済時代」(The Pre-Economic Age)だったが、書籍化された時に「準備の時代」に変更された(CW7, p.13, 17)。それは「私が遡ろうとしている時代は歴史の黎明 the dawnの直前、むしろ黎明そのものといった方が良いかもしれない」時代、「目撃できるはっきりとした記述があり、また古代法の中に十分な痕跡と結果を追求できる」時代である(CW7, p.23)。
- 13) 「もちろん、もし直観論者(intuitionist)が先史時代の人間(prehistoric men)についてのこの結論を受け入れるとすれば、すべての道徳性を効用の遺伝的経験(inherited experience)に還元しているスペンサー氏、あるいはそれを遺伝的同感(inherited sympathy)に還元しているダーウィン氏、さらには人間の道徳的性質の全てを倫理的直観(ethical intuition)あるいは生理的本能(psychological instinct)からの助けを全く借りずに組み立て直そうとしているミル氏も、確かに受け入れるだろう」CW7, p.85。
- 14) 『自然学と政治学』の表題の解釈については、岩重(1995)参照。
- 15) バジョットは個人による闘争はほとんど考慮に入れていない。それはおそらく本書が政治社会の分析に関心を向けているからであり、また人間は孤立的存在として生きることが難しいので、必然的に個人闘争に対して集団闘争が優越するからであると思われる。
- 16) 「メインによれば『古い法律は契約に基づかず、に身分に基づいている』。信頼できる記録が示す限りでは、古代文明の生活は、生活のあらゆる重要な部分が慣習によって支配されていた時代にまで遡る。この慣習は、言い換えれば社会的・政治的・宗教的に不可分で一体をなしている」。なおバジョットは初期社会に適した唯一の文明は「慣習文明」(customary-civilisations)であるとしている。CW7, p. 106: 邦訳192頁。
- 17) バジョットは『自然学と政治学』の対象領域を次のように設定している。「……私は人種の起源(the origin of race)を説明しようとしているのではなく、国民(of nations), 言い換えれば種族(of tribes)起源を説明しようとしているのである」CW7, p.78, 邦訳136頁。

「既に述べたように、本書は国民の生成(nation-making)を問題にするのであって、人種の生成(race-making)を問題にするのではない。私は様々な人間が

- いる世界を仮定し、そこで顕著な対比が蓋然のかつ自然的に各々の中で生じてきたかを明らかにしようとしたに過ぎない」(CW7, p.80, 邦訳136頁)
- 18) バジョットはさらに、古代社会に必要なのは人間の生活全てを支配する単一な政府、すなわち国家と教会の同一性であると指摘している。「王は僧侶でなければならなかったし、予言者は王でなければならなかった、というのは、彼は同一人物だったからである」CW7, p.31: 邦訳32頁.
- 19) この意味で、バジョットは進化をダーウィンのというよりもラマルクの考えていたと思われる.
- 20) バジョットによれば、それはあたかも文学上の文体 (style) である. たとえば新しい文体が大当たりする. すると他の作者がこの文体を真似るようになる. こうして読者に新しい文体が馴染みのものとなる (服装の流行もこれと類似). このように流行を決定的する原因は多分に偶然による、と彼は考えた.
- 21) バジョットは宗教的指導者が人々を説教する場合に際して、次のように述べる. 「人は型 (type) によって導かれるのであり、議論では導かれない. 何か魅力的な実例を人々の前に突きつけねばならない. さもないと説教は無駄になり、教義は伝えられない」(CW7, p.69). この見方は『イギリス国制論』と『ロンバード街』においても通底していると思われる. 『イギリス国制論』と『ロンバード街』の相関関係については山根 (2003) を参照.
- 22) これは「十分な前進力を持っている. しかしそれを制御する時も知っている」能力である. なおバジョットは同時に、自由に議論できる問題が当初から社会の全分野に行き渡ったならば、社会はその衝撃によって破壊されていただろう、と指摘している. CW7, p.106-110: 邦訳192-198頁.
- 23) バジョットは、多くの国家が旧来の慣習を打破できずに停滞したが、イギリスを含むゲルマン諸国家は議論によって慣習を打破し、変化に適応し得たと考えた.
- 24) 「さらに議論は、進歩に対してそれ独自のインセンティブを持っている. それは知性に優先権を付与する」. CW7, p.110: 邦訳199頁.
- 25) 山根 (2003) 参照.
- 26) バジョットは地方銀行の副頭取の父を持ち、母はその銀行創立者の姪だった. 彼は大学卒業後に父の跡継ぎとして入行し、ロンドンにおける窓口として、またロンドンの最高責任者としての職務を果たした.
- 27) James Wilson (1805-1860) ジャーナリスト、政治家. 若い頃は実業界で活躍していたが、1843年に自由貿易原理を促進するため、『エコノミスト』を創刊した. 彼は義理の息子であるバジョットに引き継ぐまで、『エコノミスト』を単独で編集した. アバディーン連立内閣 (1852-1855) の財政秘書官や商務省の次官も務めた.
- 28) 第6章「ロンバード街は何故しばしばひどく不振になり、時に極めて活況を呈す

- るのか(Why Lombard Street is often very dull, and sometimes extremely excite)」はそのタイトル通り、ロンバード街における景気循環について描かれている。
- 29) 興味深いことに、バジョットは『ロンバード街』の中でパニックを定義していない。彼にしてみれば、パニックは起こってみればわかる、と考えていたのかもしれない。
- 30) その意味ではダーウィンよりもむしろラマルク、C.ライエル、H.メインから影響を受けている。なおJ.バローは、バジョットを「ラマルク主義者」と呼んでいる。Barrow (2000) p.87.
- 31) 模倣の最たるものとして彼が重視したのが恐慌における不安の伝染である。
- 32) バジョットは『ロンバード街』で中央銀行という言葉をはほとんど用いておらず、Bank of England もしくは The Bank と呼称するのみである。ただし、これはバジョットの思想的特徴である具体化・具体的表現の手法が採られている証であると思われるので、用語が見当たらないからと言って中央銀行観がないとは言えない。むしろ筆者は、現在のような中央銀行観は当時存在せず、バジョットの『ロンバード街』によってある種の中央銀行観が形成されたと考えたい。
- 33) バジョットの指摘が先駆的なものではなく慣行の追認である、という解釈は金井(1984)を参照。
- 34) この見方は『イギリス国制論』の冒頭においても宣言されている。すなわち「外見上は、引き続き同一性を保ちながら、内部では長い間ひそかに変化している」ので、「祖先の時代には真実であった言葉」による解釈に変わるものを提示しなければならない、という主張である。CW5, p.203: 邦訳65頁。

参考文献

[一次文献]

- Bagehot, W. (1965-86) *The Collected Works of Walter Bagehot* 15 Vols., ed. Norman StJohn-Stevan, London: The Economist.
- 『イギリス国制論』*The English Constitution*, CW 5 (連載1865-67, 刊行初版1867, 第二版1872). 小松春雄訳『イギリス憲政論』辻清明責任編集『バジョット・ラスキ・マッキーバー(世界の名著60)』中央公論社, 1970年.
- 『自然学と政治学』*Physics and Politics*, CW 7 (連載1867-1872, 刊行1872). 大道安次郎訳『国民の起源』慶應書房, 1942年.
- 『ロンバード街』*Lombard Street*, CW 9 (刊行1873). 宇野弘蔵訳『ロンバード街』岩波文庫, 1941年.

[二次文献]

- Barrow, J. (2000) *The Crisis of Reason: European Thought, 1848-1914*, Yeal University Press.
- Buchan, A. (1960) *The Spare Chancellor: The Life of Walter Bagehot*, Michigan State University Press.
- Buckle, H.T. (1973) *History of civilization in England*, New York, D. Appleton.
- Collini, S./Winch, D/Burrow, J. (1983) *That Noble Science of Politics: A study in nineteenth-century intellectual history.*, London, Cambridge University Press.
- Dexter, B. (1945) "Bagehot and the fresh eye", *Foreign Affairs*, XXIV, p.111.
- Fetter, F.W. (1965) *Development of British Monetary Orthodoxy, 1797-1875*. Harvard University Press., pp.256-283.
- Giddings, F.H. (1909) "Development of social theory", *Popular science monthly*, July.
- Giffen, R. (1880) "Bagehot as an Economist", *The Fortnightly Review*, April/1, in John-Stev-as, N.S.ed. (1978) *The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.11, The Economist.
- Jones, G. (1980) *Social Darwinism and English Thought: The Inteaction between Biological and Social Theory*, Sussex, The Harvester Press.
- John-Stevas, N.S. (1959) *Walter Bagehot - A study of life and thought together with a selection from his political writings*, London, Eyre & spottiswoode.
- (1963) *Walter Bagehot*, London, Longman for the British Council.
- (1974) "The Political Genius of Walter Bagehot", *he Collected Works of Walter Bagehot* Vol.5, ed. Norman St.John-Stevas., London: , The Economist.
- Keynes, J.M. (1926) 'Bagehot's Lombrd Street'. in *The Collected Works Writing of John Maynard Keynes*, Vol.15, The Royal Economic Society, 1981, p.533.
- Maine, H.S. (1861) *Ancient law: its connection with the early history of society and its relation to modern ideas*, London. (安西文夫訳 (1948)『古代法——その初期社会史に対する関係およびその近代思想に対する関係』史學社)
- Price, L.L. (1891) *A Short History of Political Economy in England, from Adam Smith to Arnold Toynbee*. (石渡六三郎訳 (1928)『英国経済学史』日本評論社)
- Sayers, R.S. (1978) "Bagehot as an Economist", in John-Stevas, N.S.ed.*The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.9, London, The Economist, pp27-43.
- "The Genesis of the Treasury Bill (1876- 7)", in John-Stevas, N.S.ed.*The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.11, London, The Economist, pp405-409.
- Small,. (1953) "An Interpretation of Walter Bagehot's Physics and Politics", The

University of Chicago.

岩重政敏(1995)『バジョット『フィジックス アンド ポリティックス』——その標
題と主題』, 佐々木毅編(1995)『自由と自由主義』東京大学出版会.

金井雄一(1989)『イングランド銀行金融政策の形成』名古屋大学出版会.

——(1992)「『通貨論争』後における貨幣・信用論の展開」経済学史学会編『経
济学史——課題と展望——』九州大学出版会.

岸田理(1979)『ウォルター・バジョットの研究——経済思想および経済理論を中心と
して』ミネルヴァ書房.

鈴木俊夫(1998)『金融恐慌とイギリス銀行業——ガーニィ商会の経営破綻』日本経済
評論社.

添谷育志(1995)「バジョット——権威・信用・慣習」(藤原保信・飯島昇蔵『西洋政
治思想史Ⅱ』), 新評論.

大黒弘慈(2000)『貨幣と信用』東京大学出版会.

大道安次郎(1948)「『自然科学と政治学』解説」(大道安次郎訳『自然科学と政治学』)
岩崎書店.

遠山隆淑(2002)「ビジネスとしての政治——ウォルター・バジョットの議会改革論
——」九州大学政治研究会編『政治研究』第49号.

姫野順一(2003)「社会進化論と新自由主義——19-20世紀転換期における経済(貧困)
と政治社会のイデオロギー諸類型」(岡村東洋光・久間清俊・姫野順一編著『社会
経済思想の進化とコミュニティ』)ミネルヴァ書房.

藤田幸雄(1987)『中央銀行の形成——イングランド銀行の史的展開』多賀出版

南谷和範(2003)「ウォルター・バジョットの『議会改革論』」学習院大学大学院政治学
研究科『学習院大学政治学論集』第16号.

山根聡之(2003)「『ロンバード街』における「高貴な部分」——ウォルター・バ
ジョットの政治経済思想を統合する試み」『一驚論叢』第130巻第6号(2003年12月
号).

吉田忠(1978)「バジョットと進化論」『東北大学日本文化研究所研究報告』第14集.

2005年7月20日受稿

2005年9月12日レフェリーの審査をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)